

# The Reminiscence of Exellia 蒼天のヴァルマーレ

## 蒼天のヴァルマーレ

### 作成レギュレーション

#### 基本概要

- ・経験点：315000 点
- ・資金：445000G
- ・名誉点：2200 点
- ・成長回数：390 回
- ・レベル制限：14

#### 制限事項

- ・放浪者／蛮族 PC 禁止
- ・バニラ流派入門・秘伝使用禁止
- ・武器防具強化に関する特殊制限
- ・シナリオ報酬成長回数が 10 以上のとき、その 6 割の偏重割り振りの禁止
- ・戦利品判定は振る

#### その他注意事項

- ・レベル制限逸脱 PC の Lv シンク
- ・ステータス制限逸脱 PC のステータス再振り分け
- ・成長回数制約逸脱時の強制デッドエンド

### メモ群

#### 導入

君達は、魔大陸にて探索をしていた。

しかしこれといった成果はなく、ムサシによる分析を待つほかなかった。

(※GM メモ : RP 待機)

#### トーレス

「まずは、ここをベースキャンプとして、天皇ご一行様の行方を捜すのがいいと思うが。

どうだ？闇雲に歩いても、効率的ではないだろう？」

スチュアート

「確かに、この広い『魔大陸』を、あてどもなく探し回るのは、いかにも具合が悪い…。

だが、どうやって天皇たちを探そうというんだ？」

ムサシ

「恐らく、ここは当時の飛空艇発着場。これだけの規模の施設となれば、魔大陸の中枢施設と繋がる、情報端末があるはず…。それを探すんだ。みんな、手分けして辺りを探し、人が操作できそうな装置がないか、見て回ってくれない？」

(※GM ×モ : RP 待機)

**探索（スカウト観察）判定 目標値：33**

とりあえずの運試しであるため、成功したら何かあるとかはありません。

スチュアート

「なんて巨大なんだ…。以前搭乗した、『クラディオス級多目的強襲母艦』すら、着艦できそうな規模だぞ…」

**見識（セージ知識）判定 目標値：31**

成功時、『クラディオス級多目的強襲母艦』がヴァルマーレにて就役しており、そのうちの二番艦「トレマイオス」が貸与されていることを思い出す。

(※GM ×モ : RP 待機)

ジェシカ

「ディスエリィアの魔導技術の中には、ハルロビダソラスの技術を再現したものも少なくないと聞く。端末さえ見つかれば、どうにか動かせると思うのだけれど…」

そう言って、悩むジェシカを尻目に、探索を続けることになる。

(※GM ×モ : RP 待機)

ヴォルフラム

「悪いが、俺は機械には疎いんでな…。

それよりも、気になるのは竜の気配を感じることだ。この『魔大陸』に、ドラゴン族がいることでもいうのか？」

君達は、トーレスたちのもとへ戻ることになる。

(※GM ×モ : RP 待機)

トーレス

「そうか、なにも見つからなかったか。こっちは一応、見つけたものの…どうにも起動しなくてな。機工士としての俺の勘も、いよいよ鈍ってきたか？」

気付くと、ムサシがいない。どこかへ行ったのだろうか？

探索（スカウト観察）判定 目標値：33

成功時、転がる音が聞こえる。

ムサシ

「あいたた…」

(※GM ×モ : RP 待機)

トーレス

「どうした！？何があった！」

ムサシ

「トーレス。面白そうなものがないか探していたら、ガラクタに足を取られて…」

流石のトーレスも眉をひそめた。

トーレス

「馬鹿野郎、遊びでやってんじゃないんだぞ。ハルロビダソラスの防衛兵器が、ウロウロしているような場所まで、ひとりで出していくなんて、なにを考えてやがる…！」

(※GM ×モ : RP 待機)

ムサシ

「すまんね！でも、おかげで良いものを見つけたよ！」

そう言って、ムサシは地面に埋まった白い玉っころを持ち上げる。

トーレス

「…なんだ？防衛兵器の残骸か？」

ムサシ

「残骸じゃないわ。こいつ…まだ生きてる」

そう言ってムサシが膝蹴りを軽く入れると、その白い玉っころが起動する。

(※GM ×モ：RP待機)

トーレス

「マジで言ってるのか…」

困惑したように、トーレスは肩を落とす。

誘導システム

「ピピ…『誘導システム』起動…。…初回セットアップを行いマス…。

ライセンス条項を確認してくだサイ」

ライセンス条項に同意する？

・同意する！

・同意する…

ムサシ

「おおい、選択肢ないじゃないか！！」

誘導システム

「ライセンス条項への同意を確認…。新規アカウントを登録しマス。

お客様のお名前を、音声で入力してくだサイ」

(※GM ×モ：RP待機)

誘導システム

「ピピ…新規アカウントの登録が完了しまシタ。ムサシ様、光の戦士様…。ようこそ『アジス・ラー』へ！ガイドをスタートしマス！」

ムサシ

「トーレエエエス！後は任せたア！」

トーレス

「おおい、マジかよ！？」

### 玉っころとの奇妙な冒険

君達は、港湾施設の魔動機端末の前に立った。

トーレス

「おい、玉っころ！この施設のシステムを解析できるか！」

その質問に答えるように、誘導システムは端末の電源を入れる。

端末が起動し、ホログラフィックモニターとキーボードが出現する。

ムサシ

「おお、ついた！」

トーレス

「なになに…、人工浮遊大陸『アジス・ラー』…ポート・ヘリックス…再稼働フェーズを実行中？」

(※GM メモ：RP 待機)

そこへ、スチュアートたちも戻ってくる。

スチュアート

「再稼働…ということは、最近になって目覚めたということか」

トーレス

「恐らく、有仁が『鍵』を使った影響だろうな。おい、玉っころ！俺達以外に『人』がいる施設はどこだ」

それに呼応し、誘導システムがビープと鳴く。

トーレス

「アジス・ラー旗艦島の『魔科学研究所』…、および、『博物戦艦』が職員の制御下にあり…、ガンマ管区に不法侵入者の存在を確認。迎撃システムが対応中…ね」

ジェシカ

「その不法侵入者は、コミニテルン軍の兵力と見て間違いない。問題は、天皇がどこに向かったのかだけど…」

トーレス

「稼働中の施設のうち、最もエネルギー量が多いのはどこだ？  
恐らく、そこに有仁がいる」

(※GM ×モ : RP 待機)

誘導システムが情報を識別する。

トーレス

「…魔科学研究所内…『三闇神制御区』だと？」

スチュアート

「三闇神…なんだそれは…」

(※GM ×モ : RP 待機)

誘導システムがビープ音を鳴らし、権限を要求する。

トーレス

「最重要軍事機密に該当。情報開示には、執政官級の機密コードが必要…だとな」

ジェシカ

「悪い予感がするわね…。ひとまず『旗艦島』とやらに渡るルートを見つけて、その『魔科学研究所』と言う場所を目指そうか」

(※GM ×モ : RP 待機)

スチュアート

「ああ、そうだな。天皇たちが何の理由もなく、逃げ込んだとは考えにくい」

トーレス

「対蛮神兵器を生み出し、蛮神『ミラボレアス』を衛星内に捕らえました、魔動機文明時代の国家、ハルロビダソラス…。その研究施設に、有仁が求めるナニカがあるはずだ」

(※GM ×モ : RP 待機)

君達は、誘導システムを更に操作することになる。

誘導システム

「光の戦士様。ピピ…なにか、お調べいたしましょウカ？」

(※GM ×モ : RP 待機)

誘導システム

「ピピ…ピピ…。アジス・ラー旗艦島の『魔科学研究所』に、視察を申請中…。

……申請の承認を確認。それでは、視察規定に基づいて、旗艦島の『魔科学研究所』まで、ご案内します。こちらの誘導に続いてください。

なお、本誘導に従わず、立入禁止区域に侵入した場合、防衛システムによる排除行動が行われる可能性がありマス。

これに伴う損害は、免責事項となりますのでご注意ください」

そう言って、誘導システムは移動を開始する。

スチュアートはそれを見て、しばし考えた後に、言葉を発する。

スチュアート

「どうにも奇妙な成り行きだが、天皇たちが向かったとされる、魔科学研究所に辿り着くための手がかりは得られた。冒険者、そしてジェシカ、ウォルフラム殿。私達は、あの誘導システムに続いて進むとしよう。

ムサシたちは、この発着場に残って、いつでも『超戦艦ムサシ』を出せるようにしてく  
れないか？何があるか、分からないからね…」

トーレス

「ああ、了解だ。さっきの空戦での被弾も修理しないとな。何かあったら通話の耳飾りで報せてくれ。すぐに駆けつけられるよう、準備を整えておくぜ！」

(※GM ×モ : RP 待機)

スチュアート

「ありがとう、トーレス。よし、私達は行くとしよう。コミニテルン軍や天皇一派、古代の兵器に注意しながらね」

(※GM ×モ : BGM 「未解読法則～魔大陸アジス・ラー～」)

君達は、第2転送リングに到着した誘導システムに話しかけた。

誘導システム

「『魔科学研究所』の視察に先駆け、各施設をご案内します。まずはランディングポイントがある、ここ『アルファ管区』から、転送装置を利用して『ベータ管区』へ移動します。」

「ピピ…転送装置の再起動を行います…。再起動後、転送装置にアクセスし、移動してください」

そう言うと、彼の機械の背後の転送装置に火が灯る。

**探索（スカウト観察）判定 目標値：ファンブルチェック**

成功時、魔力の脈がベータ管区の転送装置と連動していることが分かる。

それに乗ると、ベータ管区に到着する。

誘導システム

「ピピ…転送装置の正常作動を確認…。おめでとうございマス。整備記録によると、過去501年間に渡り、定期メンテナンスが行われていなかった模様。正常作動したことは、驚くべき結果といえまショウ！」

(※GM ×モ : RP 待機)

君達のツッコミを他所に、心を持たぬ誘導システムは案内を続ける。

### 誘導システム

「ピピ…奇跡的に、転移装置が正常作動しましたので、『魔科学研究所』へのご案内を続行いたしまス。ここ『ベータ管区』は、キメラ生物の培養施設が集中。さまざまな生物の有用な因子を組み合わせたキメラ生物が、軍民間わず利用されているのは、ご存知の通りデス。

ピピ…当施設で生産されるキメラ生物は、帝国魔科学省認定の安全基準で、三つ星を獲得しておりますマス。ただし、『ちょっとした手違い』が稀にありますので、珍しい生き物を見かけても、近づかないようにお願いしまス。

それでは、次の転移装置に移動しまショウ」

そう言って、誘導システムは移動を開始する。

### 探索（スカウト観察）判定 目標値：33

成功時、大型の魔物と遭遇する際に、不意打ちを受けずに済む。

失敗時、敵と強制エンカウント。

敵：レプトイド×3

なんだかんだで到着すると、誘導システムが告げる。

### 誘導システム

「ピピ…どうやら『ちょっとした手違い』が発生した模様。転移装置の起動に必要なエネルギーが供給されていまセン。

ピピ…エネルギー供給ラインに異常を検知…。キメラ生物が、不正にエネルギーを取得しているようデス。『キメラ生成ラボ』と『生体培養局』に異常源を確認」

(※GM ×モ：RP 待機)

### スチュアート

「仕方ない、手分けしてキメラ生物を駆除しよう。君達は『キメラ生成ラボ』を頼む。『生体培養局』の方は、私達が分担する。障害を取り除けば、エネルギーも再供給されるはずだ。キメラ生物の駆除が終わったら、ここで落ち合おう」

(※GM ×モ：RP 待機)

君達が現場に赴くと、キメラ生物がエネルギーを捕食しているのを確認した。

敵：グロウイング・エンプーサ×6

倒し終え、転移装置に戻ってくる。

(※GM ×モ : RP 待機)

誘導システム

「ピピ…エネルギーの再供給を確認…。転移装置を再起動しマス…。

転移装置にアクセスし、移動してくだサイ」

(※GM ×モ : RP 待機)

対決、ディスエリィア

転移先で、ディスエリィアの軍勢と鉢合わせる。

見ると、彼らの飛空戦艦が墜落しているではないか。

スチュアート

「やはり、コミニテルン軍の連中も辿り着いていた。巨大戦艦のほうは…応急修理中といったところか…」

ジェシカ

「彼らの狙いも、ハルロビダソラス帝国の遺産…いえ、もしくはこの島そのものか…？」

ヴォルフラム

「敢えて戦うつもりはないが、俺達を邪魔するのであれば、切り結ぶだけだ」

(※GM ×モ : RP 待機)

やや血の気が多いヴォルフラムにドン引きしつつ、君達は様子を見る。

誘導システム

「ピピ…現在、ここ『ガンマ管区』に、侵入者の存在を確認…。ライセンス条項にもあるとおり、侵入者との遭遇に伴う損害は、保障対象外となりますのでご注意くだサイ。

それでは、次の転送装置に移動しまショウ。『デルタ管区』には、当視察の目玉がござりますので、生存状態を維持することをオススメいたしマス。

侵入者は大部隊であることが予想されマス。遭遇に気を付け、慎重にお進みくだサイ」

**探索判定 目標値：25**

成功時、敵と遭遇すること鳴く移動することができる。

失敗時、敵とエンカウント

敵：コミニテルン・ホプロマクス×（失敗者人数）

そこでは、ヴォルフラムが様子を覗っていた。

ヴォルフラム

「待て…。様子がおかしいぞ。かなりのコミニテルン軍兵士がいるぞ…！」

そこでは、青鎧の将軍——ニコライ・ルニッチが、兵士たちに指示を飛ばしていた。

ニコライ・ルニッチ

「艦内でも説明したとおり、これより、我々は魔大陸中枢に向かう。…」

的確に指示を飛ばしているようで、兵士たちは忠を尽くしていた。

しかし、彼らもまた、『魔科学研究所』をめざし、「蛮神を生きたまま捕らえる、ハルロビダソラス秘術」を目指しているようだ。

ジェシカ

「蛮神を封じる技術…。それが、コミニテルン軍の狙いか」

スチュアート

「古の蛮神『ミラボレアス』を封じた技術が、ここに残されているということか…」

ジェシカ

「蛮神を封印できれば、確かに再召喚は防げる。蛮神問題に対する、ひとつの解法とも言えなくもない…」

（※GM × 王：RP 待機）

スチュアート

「いいや、答えは既に出来ているよ、ジェシカ。ミラボレアスは蘇り、絶望が世を包み、世界は崩壊しかけたんだ。『第七靈災』を忘れたわけではないだろう？」

ジェシカ

「封じられた蛮神は、負の感情を膨らませ続け、やがて大いなる災いを引き起こすということか…」

それを聞いたヴォルフラムが振り返る。

(※GM ×モ : RP 待機)

ヴォルフラム

「目下の問題は、天皇の方だ。

現況でコミニテルンと戦ったとして、それを最も喜ぶのは、奴らだからな」

スチュアート

「そうだな、先を急ごう。まずは天皇を止める…。コミニテルンはその次だ」

(※GM ×モ : RP 待機)

そう言って、君達は前に進む。

そして辿り着いた誘導システムのところで、敵に追いつかれる。

誘導システム

「ピピ…光の戦士様に追跡痕跡を確認。『魔科学研究所』の視察を続行するため、侵入者を排除してください」

ジェシカが、それを睨む。

ニコライ・ルニッチ

「通信が途絶えた部隊があると思って来てみれば…、貴様らだったとはな…。  
この前は邪魔が入ったが、ひとつ手合せ願おうじゃないか」

部下たちを下がらせ、その銃剣を構える。

ニコライ・ルニッチ

「フレイディアの英雄の実力…見極めさせてもらうぞ！」

敵：ニコライ・ルニッチ

君達は、ニコライ・ルニッチを圧した。

ニコライ・ルニッチ

「ふむ…。さすがは、英雄と呼ばれるだけのことはある…か。なかなかの戦いぶりだ。

…さて、こちらの準備が整ったようなのでね。戯れの時間は終いにしよう」

そう言って、コミンテルン兵士が降りてくる。兵士に飛空艇、魔動機の群れ…。

(※GM×モ：RP待機)

ニコライ・ルニッチ

「お前達、適当に相手をして時間を稼いでおけ！例の秘術さえ手に入れれば、こんなところに用はないのだからな」

そう言って、ニコライを乗せた飛空艇は去って行く。

ヴォルフラム

「時間稼ぎか…！」

ジェシカ

「こうなったら、やるしかないようね」

スチュアート

「君達は先に進むんだ！ここは、私達で持ちこたえる！」

(※GM×モ：RP待機)

ヴォルフラム

「光の戦士よ、これをお前に預けておく。——お守り代わりにでもしていろ。…俺もすぐに向かう」

魔動機の群れが、君達を取り囲む。

ジェシカ

「さあ、おしゃべりもここまでのようよ。早く行って！行って、天皇を止めなさい！」

大急ぎで転移装置を起動させ、君達はそれに乗り込む。

大いなる古龍

転移先で、君達は誘導システムと合流する。

誘導システム

「ピピ…さあ、視察の目玉。『デルタ管区』…ドラゴン族制御実験区画デス。

世界中から捕らえた生きのいいドラゴン族が、今日も元気に飛び回っておりマス。ハルロビダソラス帝国軍万歳！ハルロビダソラス帝国軍万歳！」

(※GM メモ : RP 待機)

誘導システムは、デルタ管区管制システムと取り合い、状況を確認する。

誘導システム

「ピピ…残念な情報が入ってまいりまシタ。デルタ管区管制システムからの情報によりますと、旗艦島に通じる転送装置が、破壊されているようデス。

記録を参照したところ、237 年前の拘束具の故障に伴い、制御下から離れたドラゴン族の仕業と判明…。

まことに申し訳ございませんが、各自、自己責任にて移動手段を確保し、『魔科学研究所』前まで、お越しください」

(※GM メモ : RP 待機)

頭を抱える君達のもとに、影身セレネが現れる。

セレネ

「道を失ったようだな。お前の旅が、こんな辺鄙な場所に及ぶとはおもわなんだ。にしても、ハルロビダソラス、か…。

彼らもまた、古のヴァルマーレ人と同様、竜の強大な力に恐れを抱きつつ、その力を欲した。そして、奇妙な機械仕掛けの首輪を創り、支配を試みたんだ。

結果、どのような悲劇が起こったのか…、竜と人との争いが、如何に神と交わるのかを知り、考えるべきだろう…」

(※GM ×モ : RP 待機)

近づくと、そこにはなぜか隠居している巨竜がいた。

？？？？

『数百年の長きに渡り、閉ざされてきたこの地に、再び人が訪れようとは…。何者だ?』

セレネ

『久しいな、バハムート。こんなところで引きこもり生活とは…』

(※GM ×モ : RP 待機)

バハムート

『南方の小ケルディオンではやることが少なくてな。聖王の影身よ、本体はどうした?』

セレネ

『故あってここには来れなくてな…。お前では理解の及ばぬところか。竜とヒトとの争いの禍根を断つため、自ら苦難の道を歩むというのでな…』

(※GM ×モ : RP 待機)

そうして、セレネは事情をドラゴン語で伝えた。

バハムート

『ハハハハハハ、なんてことだ、面白いことが起こっているものだな…！まさか、ヴァルマーレでもそんな馬鹿げたことが起こっていようとは』

セレネ

『…ティアマットとはどうした?』

ぐきゅう！というような音が走り、バハムートが露骨にぴえん顔になる。

バハムート

『「人との橋渡しをするのはいい、ハルロビダソラスの軍勢を退けるのもいい。お前は理を以て考えるのを覚えるために 3000 年出禁だ！」…と、600 年前に。

『理』を覚えるため、ハルロビダソラスとは友好を結んでいたが…、まさか滅んでいようとは。これが笑わずにいられるか！

月の船員と協力して、我ではない『影身』を生み出した…。それが、汝らに伝わる『黒龍ミラボレアス』だったというわけだ。

よいか、人の子よ。神とは想像力の賜物。願いの力が、星の命を用いて作り出す虚。

そして、この地にはハルロビダソラスに抗わんとして、降ろされた多数の神が封じられている。…これを解き放ってはならん。争いの禍根を絶つならば、神に縛る弱き者と、その眼を曇らせる祝福無き者共を倒すのだ』

セレネ

『…600 年の時を経ても、どこにも寄りつけぬというのか』

バハムート

『我はな、最先端に興味をそそられるタチだ。自らの行いが過ちであれど、知らぬものを知ろうとする欲は止められぬ。ティアマットには、これを『理』と理解してもらえなかっただけだ。

それと…我を象った偽物には気を付けろ』

その言葉と同時に、最後の『光の加護』の封印が解除される。

青白い魔法陣が復帰し、そして形を変える。大きな花のような、6 片の菱形に、それぞれ 1 個ずつの円を内包したものへと。

ハイデリン

「クリスタルに導かれし光の戦士よ。あなたの心に、再び光の宿りを感じます。

よくぞ、宙準星の試練に耐えました。しかし、安心してはなりません。

深淵に潜む者達が、すぐそこまで迫っています。今一度、あなたに光の加護を。

そして、どうか世界を光あるものに——』

(※GM ×モ：RP 待機)

幻覚が晴れ、起き上がる君達。

セレネ

「我らの『爪』のすべてを打ち碎き、再び、光の加護を取り戻したか…。  
生まれ落ちてより、今日この日に至るまで、私は、お前達より心が強い者を知らぬ。  
光神の使徒よ。今のお前達であれば、我が背に乗るに相応しい。  
光神との盟約に従い…今こそ、宙準星の翼を、お前達に授けよう！」

そう言って、セレネは光に包まる。  
君達に、心臓を握られるような感覚が走る。  
そして、その翼が君達の背に顯現する。

セレネ  
『行くぞ、祝福無き者どもを討つために！』

「ウイング・オブ・ライズ」発現  
《ウイング・オブ・ライズ》が発現した。  
これにより、『双翼の秘技』にカテゴライズされる【ウイング・オブ・デストラクト】  
を使用できるようになる。

### 蒼天のヴァルマーレ

誘導システム  
「お待ちしておりました、光の戦士様。アジス・ラー旗艦島へようコソ。ご案内も、いよいよ大詰めとなりまシタ。ですが、『魔科学研究所』の前に、侵入者の勢力がけんちされていマス。視察を続行するため、侵入者を排除してくだサイ」

敵：コミニテルン・ホプロマクス×7（ウェーブ1）、コミニテルン・スペルキャスター×6、コミニテルン・パラディオン×1（ウェーブ2）

誘導システム  
「ピピ…侵入者の排除を確認…。『魔科学研究所』の入場ゲートをアンロック。解錠申請…承認…ゲートオープン。当ガイドは、これにて終了いたしまス。ご利用、ありがとうございます。

ピピ…。光の戦士様、ひとつ忠告ヲ。『魔科学研究所』内に、未知のエネルギーを探知しております。どうか、お気をつケテ。数百年ぶりに、誘導システムとしての責務を果たすことができ、大変、感謝しております。ムサシ様にも、よろしくお伝えくだサイ。

ピピ…それでは、『魔科学研究所』の視察をお楽しみくだサイ…。

誘導システム終了…シャットダウンします…」

### コンテンツ解放：蒼天聖戦 魔科学研究所〔ALT〕

#### 蒼天聖戦 魔科学研究所〔ALT〕

(※GM ×モ：BGM「イマジネーション～蒼天聖戦 魔科学研究所～」)

君達は、魔科学研究所に入った。

君達の存在に気付いた魔動機が襲いかかってきた！

敵：ハルロビダソラス・リサイクラー×5

先へ進むと、床が競り上がって敵が襲いかかってきた！

敵：ハルロビダソラス・ハンター×3、エンフォースドロイド 21A×1、ハルロビダソラス・アベンジャー×1

奥に進むと、魔動機群を一掃するニコライ・ルニッチの姿を見る。

ニコライ・ルニッチ

「遭遇したからには捨て置けんか…。行くぞ、フレイディアの英雄よ！」

敵：ニコライ・ルニッチ

君達は、ニコライ・ルニッチを圧倒した。

ニコライ・ルニッチ

「チッ、流石に手強いか…。ここは退かせてもらおう…またいざれな！」

彼はそう言って、撤退した。

先へ進むと、大量のバイオマスが襲いかかってきた！

敵：カルチャード・バイオマス×12

バイオマスを蹴散らし奥に進むと、培養システムがいつの間にか機能停止していた。

セレネ

「ここの兵器群は破壊した！お前達は先へ！」

君達は昇降機に乗り、更に下へと降りていく。

敵：クローン・サーマタージx4、クローン・グラディエーターx2

奥へ進むと、円舞台のようなところへ出る。

そこに、虚空から黒の剣士とアルケイアが現れる。

黒の剣士

「来たか、光の使徒…」

アルケイア

「なぜ、お前はそもそも祝福に拘る？神とは、人の意志によりて降りしもの。その神と神との争いが齎す混沌こそが、我ら祝福無き者がつけいる産湯となるのだ」

黒の剣士

「祝福の総篡奪を経て、世界は再び色を取り戻す。そして、世界をるべき姿に再創造されるんだ」

アルケイア

「すべては、愛すべき民たちのために！」

黒の剣士

「邪魔はさせないよ、光の使徒ッ！」

敵：“黒の剣士”676c7440377638347440、“不屈の女”アルケイア・ヴェナトリクス

君達は、黒の剣士たちを圧倒した。

黒の剣士

「よもや、これほどの力を…！」

アルケイア

「認めん、断じて認めはせんぞ！黒の剣士！今こそひとつに！」

黒の剣士

「仕方あるまい。『超える力』の真なる使い方を見せてやる。魂の境界さえ、超えるほど  
の力をな…！」

そう言ったふたりが、空中に浮遊する。

(※GM ×モ：RP待機)

アルケイア

「我は汝となりて——」

黒の剣士

「——汝は我となる」

ふたりの魔力が合体し、歪な融合体が現れる。

アザーブド・プライム

『贊となるがいい！我らの世界の新生のために！』

敵：アザーブド・プライム〔ファダニエル・イグオルム〕

君達は、アザーブド・プライムを打倒した。

アザーブド・プライム

「ぐおおお！？魂に境界が造られているッ！？ええい、忌まわしきハイデリンめ！」

魔科学研究所〔ALT〕→ナイツ・オブ・ラウンド討滅戦

アザーブド・プライムから分離したふたりが、地面にへたり込む。

黒の剣士

「チッ、光の加護を、完全に取り戻していたか…！僕達の『超える力』を打ち破るほどに  
加護が強くなっているだと…？…このままでは」

アルケイア

「退くぞ黒の剣士…。奴は今、我らの魂を碎く術を持たぬ！」

そう言った彼女は、次元の狭間に逃げようとする。

それを、君達は逃さない。

ウイング・オブ・デストラクトを使え（目標値：ファンブルチェック）。

（※GM メモ：RP 待機）

アルケイア

「馬鹿な！？グ、グアアアアアアアアアアアアア！」

アルケイアの魂は、琥珀龍神の炎に灼かれて消失した。

黒の剣士

「へえ…。そんな奇策を持っていたなんて…。しかし、もはや小細工はないだろう？」

PCへの選択肢

- ・それはどうかな？
- ・その読みは甘いよ

その時だった。

有仁

「やはり、ハイデリンの加護を受けし『光の戦士』といえど、琥珀龍神の力なくして、祝福無き者を斬ることは叶わぬか…」

振り返ると、そこには棺を抱えた騎士を連れた、現天皇・有仁の姿があった。

黒の剣士

「陛下だと！？」

有仁

「かつて白壁王と十二騎士たちは、大きな犠牲を払いながらも、フェルニゲシュを退けた。そして、ふたつの『竜の眼』を手に入れ、以降、ヴァルマーレ宮内庁は、これを厳重に管理してきた。『蒼の竜騎士』の力の源としてな…。」

光の使徒よ。お主の持つそれが、フェルニゲシュの左眼…。では、右眼はどこにあるのか？」

騎士たちは、棺を開ける。

有仁

「初代『蒼の竜騎士』…征竜将『ハルドラス』…。眼から力を引き出しながらも、その力に呑まれ、朽ちぬ死体と化した哀れな男よ。闇の使徒、祝福無き者よ…。貴様らは、人々に神降ろしの手法を教え、争いを煽り、混沌を生み出す。

だが、すべてが自分たちの思惑通りに進むなどと、思わぬことだ…」

黒の剣士

「貴様…！」

有仁が、錫杖を天に掲げる。

有仁

「伝説の王を我が身に呼び降ろし、我は神となる…」

そうして降りた、憑依型蛮神は、ハルドラスの死体を剣に変える。

騎神フツヌシ

「『千年戦争』により蓄積された民の祈りと、『眼』は齎す莫大なエーテルとが創り出す、消え去ることのない永遠の神…」

黒の剣士

「永遠の神…だと…！？」

(※GM × E : RP 待機)

騎神フツヌシ

「人を侮りすぎよな、黒の剣士…」

立ち上がる黒の剣士に対し、フツヌシが突き刺そうとする。それをなんとかいなしつつも、スターバースト・ストリームを放つ黒の剣士。しかしその身体には、傷ひとつついていない…。振るわれた一閃は、過たず黒の剣士を切り裂き吸収した。

黒の剣士

構え直し、君達に向き直るフツヌシ。

## 騎神フツヌシ

「神はエーテルを喰らう。それが、祝福無き者の魂の欠片であったとしてもな。

…これこそが、千年の禍根を断つ力。祝福無き者、ドラゴン、蛮神…。争いを生み出すすべてを、我が聖剣により斬ち切り、調和の世を齎さん…。

来い、光の使徒よ。神を否定するというのなら、存分に相手になろう…！」

敵：騎神フツヌシ

### アルティメットエンド直前演出

騎神フツヌシ

「これで終わりだ、《アルティメットエンド》！」

君達は、空極の終わりを突きつけられる…！

ガラスが割れるように、空間が元に戻る。

しかし、その一撃を防いでいたのは、もうひとつの『騎神』――

レギンレイヴル

「まったく。セリーヌのやつが、エクセリアが子を孕んだと言ってきた時にはどれだけ失望したことか。まあ、それもまた人間よな…。

フツヌシだったか？お前は生きしてはおけんよ。お前だけは、な…！」

(※GM × E ; RP 待機)

碧天の騎神、レギンレイブルが、半顕現したセリーヌの姿のまま、抑えていた。

これから、常時半顕現状態の『レギンレイヴル（セリーヌ）』が参戦します。

騎神フツヌシ

「馬鹿なッ…神が導く終焉に耐え抜くだと！？」

ならん、あつてはならんぞ、こんなことはツ！！

おわり

騎神フツヌシが膝をつく。

ヤケクソになって振るおうとした剣も、顎現が解けてこぼれ落ちる。

テンパードの騎士たちも、崩れ落ちる。

有仁

「馬鹿な…千年、千年だぞ…永き祈りの声と竜の眼でさえ、及ばぬというのか！」

有仁が、君達を見る。

君達の顔は、黒く潰れていた。

有仁

「貴様は…一体何者なのだ——」

そう言って崩れ落ち、消失する。

脱出

君達は、ナイツ・オブ・ラウンドを打倒した。

そこへ、ヴォルフラムが追いついてくる。

ヴォルフラム

「終わってしまったか…。最後は俺の手でと思ったのだがな」

君達は、竜の眼をヴォルフラムに返還する。

(※GM ×モ：RP待機)

ヴォルフラム

「こいつを返してもらいに来た。なんとか、役に立ったようじゃないか」

そう言って、ヴォルフラムはアスカロンに嵌った竜の眼も奪取する。

ヴォルフラム

「これが、隠されていた、もう一つの『眼』か。永かった…ふたつの『眼』が、漸く…。  
あとはこいつを、雲海深くに投げ入れれば、俺の使命もそれで…」

(※GM ×モ : RP 待機)

そのとき、不思議なことが起こった！  
眼が強く輝き、中の思念がヴォルフラムに呼びかける…！

フェルニゲシュ  
『長らく、我が眼の力に触れ、さらには全身に我が血を浴びながら、よく耐えてきた。  
…だが、ついに貴様は願ったな、蒼の竜騎士よ！すべての荷を降ろしたいと！安らぎが  
ほしいと！！  
心の奥底に燻り続けた復讐の心…。「竜詩戦争」の影で散っていった者達の慟哭…。  
我的「眼」は、そのすべてを視、すべてを映してきた！いまこそ、すべて貴様にくれて  
やろう…そして、我となれ！』

邪竜フェルニゲシュの咆哮が、空間に響き渡る…！

(※GM ×モ : RP 待機)

ヴォルフラム  
「グオオオオオオオオ！」

その空間に、フェルニゲシュが降臨する。

(※GM ×モ : RP 待機)

そして、空間が崩壊をはじめる。ニーズヘッグが駆けつけ、言葉を零す。

ニーズヘッグ  
「未だすべてを恨むか、我が息子、フェルニゲシュよ…。  
さあ、その翼で飛べ、ハイデリンの使徒よ！」

そう言って、君達を先導する。

飛翔するムサシに、ニーズヘッグと君達が合流する。

トーレス

「ハハッ、毎度のことながら、ヒヤヒヤさせるな…」

ムサシ

「いよっしゃあ！」

魔大陸を後にしながら、ジェシカが口を開く。

ジェシカ

「倒したのね、天皇を…。いえ、蛮神『ナイツ・オブ・ラウンド』を…」

スチュアート

「ああ、本来であれば不敬とはいえ、国からの依頼を果たしたんだ。信じていたさ…。」

帰ろう、ヴァルマーレへ…。皆が、英雄の凱旋を待っている」

君達が頷くと、ジェシカが周囲を見渡し気付く。

ジェシカ

「…ヴォルフラムがいない？」

帰還後、ミシガンが竜の翼を顯現させながら帰ってきたのを見て、驚愕したように口を開く。

ミシガン

「ヴァルマーレ建国史上において、竜に導かれながら帝都に凱旋した者は、お前達が初めてだろうな。…これもまた、千年の後、伝説として語り継がれるのだろう」

降りてきた君達を、彼らは歓迎する。

スチュアート

「蛮神『ナイツ・オブ・ラウンド』と化した、天皇有仁は討たれた」

ジェシカ

「光の戦士の手によって…ね」

ニーズヘッグ

「…すべてが終わったわけではないぞ、ヒトの子よ」

ニーズヘッグの言葉に、ミシガンが息を呑む。

ニーズヘッグ

「我が名は、帝竜『ニーズヘッグ』。ハイデリンの使徒の旅路を影で見つめ、竜とヒトとの争いの行く末を見守ってきた…。ヴァルマーレの民、白壁の子らに問う。お前達は、再び、竜との調和を望むか？」

それを聞いたミシガンたちは、膝をつく。

ミシガン

「人の戦いを導いてきた虚構は崩れ去った。

そして、竜を率いてきたフェルニゲシュもまた…。

人は、竜に対し、そして同じ人に対して、幾度も同じ過ちを繰り返してきた。

無論、それを水に流してほしいとは申さん。それでも俺は、この先のヴァルマーレが、人と竜が手を携える土地となれる信じている。…それでは足りんか、帝竜どの？」

ニーズヘッグ

「その言葉、我が父祖に代わり、しかと胸に刻んだぞ。だが心せよ…。我が子、フェルニゲシュの魂は死しておらぬ。フェルニゲシュの怨念に取り憑かれ、蒼の竜騎士は墮ち、邪竜の影と化した…」

ニーズヘッグの言葉を聞き、ミシガンが立ち上がる。

ミシガン

「まさか、ヴォルフラムが！？」

(※GM メモ : RP 待機)

ニーズヘッグ

「フェルニゲシュの眷属たちもまた、我が子が発した復讐の咆哮に応えるであろう…。戦火のすべてが、消えたわけではない。竜とヒト、その本当の試練はこれからなのだ」

ミシガン

「それでも、未来を信じて散っていった者達…。

そして、我が友らの魂に誓って、俺も人も、諦めはしない！」

ニーズヘッグ

「数千年続けた戦は、一朝一夕に終わるものではない。だからこそ、次の世代に希望を伝えよ、ヒトの子らよ。その先にこそ、光に満ちた、調和の時代が待っているのだからな」

### エンディング

ヴァルマーレは、この事実を 20 年後の第七星暦 20 年 6 月 10 日に公式的に開示することを国民に公表。続く、ディスエリィアの軍勢との死闘のため、軍備の刷新を継続することを告げた。

その式典の外、停泊しているムサシの甲板上で、君達は蒼天を見上げていた。

アルトリア・キャスター

「長い旅だった…。失ったものも大きく、辛い旅路だったよ…」

蛮神の欠片である、アルトリア・キャスターも口を開く。

ムサシ

「結局、アルトリアはなんのさ」

アルトリア・キャスター

「分かんない。強いて言うなら、楽園の妖精？」

スチュアート

「でも私達は、決して歩みを止めてはいけない」

こうして、ひとつの物語の幕が閉じた。この先も、ヴァルマーレの動搖はしばし続くだろう。千年にわたって続いた、天皇による統治の終焉は、この国の有様を覆したのだ。

邪竜の眷族との戦いも、終わったわけではない。未だ、邪竜の脅威は残っている。

だが…、若き神道衛士団総長と、頼もしき盟友たち。そして、光を取り戻した英雄がいる限り。いつの日か、かつてそうだったように、真の平和が訪れ、人と竜との融和が成されると信じている。

我々は、それを紡がねばならない。次の千年に続く、新たな竜詩のはじまりとして…。

### Interlude

それは、荒涼とした月の上でそれを見ていた。

ジャック・ニコラス・トニトルス

「黒の剣士とアルケイアが散ったか…。八度目の『次元圧壊』を狙ったようだが、どうやらヒトの可能性を見誤ったらしい。とはいっても笑ってばかりもいられない。

このまま光が増長すれば、それはそれで大問題だ。我らの世界を取り戻すという、そもそもその願いが破綻しかねん。光の戦士は力を持ちすぎた。神の領域に近づくほどに…。

だからこそ、お前達の出番なのだ。『闇の戦士』よ…」

隠された真実は暴かれ、創られた神話は碎かれた。

暗き影の先に光がある信じて――

## 報酬

### 基本要素

- ・経験点：5000 点
- ・資金：45000G
- ・名誉点：300 点
- ・成長回数：10 回